

庄兵衛の「問い」を問う

—教材としての「高瀬舟」論—

松 田 典 祀

問題提起

作家論でもなく、作品論でもなく、教材論として「高瀬舟」を論ずるとはどうか。今までの「高瀬舟」論が、ことごとく鵑外が自ら掲げた「高瀬舟縁起」（以下『縁起』と記す）の二主題「財産の観念」と「安楽死」の呪縛の中にあつて、ようやく脱却のきざしを見出した経緯を三好行雄『高瀬舟』—研究史と作品論—に見出しながらも、今なお、指導書には『縁起』が掲載され、授業の参考に供されている現状をどう解釈するのか。

ニュークリティシズムを持ち出すまでもなく、本文としていったん掲載された作品は、他のどんな要素をもその作品鑑賞のインデキスに用いないとすることが、授業に於ける作品鑑賞の鉄則ではなかったか。

多忙を極める現場の教師が、高校から中学へ、たとえば「読み取り教材」から「読書教材」に扱いが変更されたといっ

でも、作者本人の解題を紹介しないはずはなし、例えそうでなくても、教師自身の解釈の基盤にしないはずはなく、教室の中ではないつても、どこでも、二主題への感慨が、生徒の「今を生きる」といった単元目標へ近づくための契機となつて思考範囲を限定している現状をどう捉えるか。もうそろそろ、教材を独立した一作品として素直に読み始めてもいいのではないか。素直に読むとは、素朴に、いつでも、だれでも、読者なら必ず持つであろう作品の中からの「問い」を見出し、その問いを探究することを意味する。問いは当然、読み進める個人によつて異なるが、作品の本質を導き出せる問いを立てることが最も価値ある問いとなる。したがつて、「高瀬舟」の教材論は、「高瀬舟」を解明しうる「問い」の設定と、その探究のプロセスにある。『問いが立てられれば、それはもう解いたも同然である。』（ジョン・デューイ）——とは、教師ばかりでなく、生徒にとつても同様である。否、生徒にそうした「問い」を設定する力をつけることこそが、読書力をつけるための教育の最終目的ではないのか。

その為には、作品そのものだけを対象にした追究の方法が必要である。つまり、作品をどこから切り込んでいくかの、視点の獲得が大切な要素となつてくる。さらに言えば、問題設定のあり方が鍵なのである。そこへ向かう教師の営みこそが教材研究と言うことになる。

教師は教材研究に基づいた読書教材の追究の方法を、「問い」の提示として生徒の前に投げ与える。生徒は、それを作品究明の突破口として受け入れ、そしてその追究のプロセスこそが授業なのであり、そうした学習展開を通して、やがて、生徒自らが或る読書教材から問題を設定する学力を備えることになる。何物をもインデキスにすることなく、自分で問いを設定し、解決していく力を、生徒たちにつけたいものである。

だが「問い」は、どのようにして見い出すのか。本来ならば、「問い」は作品追究のため、外部から設定されなければならぬ。だが、幸いなことには「高瀬舟」はその作品の中に自らの「問い」を内包していた。作品の構造上あ

えて主題追究のための「問い」がここでは設えられていたのである。「高瀬舟」は、同心庄兵衛が舟で護送される弟殺しの喜助に不思議を抱くところから始まる。人殺しの罪科を受けた喜助が、舟の中で落ち着き払って、笑顔さえ浮かべかねない状態を見た庄兵衛の問いを基軸にして、物語は進んでいく。作品追究への「問い」は、庄兵衛の「問い」とその「解答」の検証を通して、庄兵衛の抱いた不思議を解明することにある。そしてそれは、喜助の統一された人間像を結ぶであろう、といった仮説を持つことになる。さすれば、鵑外の提言によって分断された二つの主題は、自ら、その誤りを内包したまま統一化の方向に向かって結実するであろう。^(注七)かくして、私の方法論は次の三つの問いの設定によって成立する。

第一は、A 庄兵衛は「問い」の答えを獲得し得たか。

第二は、B 喜助の人格的統一性は成立し得たか。

C その結果何が明らかになったのか。

この「問い」の検証に入る前に、まず語り手の述べる舞台の状況からその必然性を確認しておく必要がある。

物語発端の前提条件

同心が上に隠れて罪人の近しい者を伴って護送する慣習があり、それを上が黙認する訳を考えると、そこには^(注八)罪人が獐悪な人物でない限り、親類との愁嘆場を設定することによる罪意識の一層深い自覚を促す効果があると考える。「所謂心得違いのために、想わぬ科を犯した人」であるならば、その反省たるやしきりであり、ここに述べられる同心が誰でも嫌う罪への悔恨を促す効果は観面なのである。

さらに、こうした「心得違いのために、想わぬ科を犯した人」たちの有り触れた例は、「相對死と言った情死を謀って、相手の女を殺して、自分だけ生き残った男」である。つまり、相手への憎悪や、おのれ一人の欲のために、罪を犯したのではなく、相手と一緒にになりたいために、相手との一体感を確認したいための行為が、結果として殺人という科を犯してしまったのであって、こうした人たちと、これから登場する喜助なる人物との間に共通する罪の性格、人間性の類似をしっかりと留めておかなければならない。

こうした条件の人物が前提として存在していた中に、毛色の違った人物が現れ出たから、庄兵衛は不思議に思ったのである。

さて、ここでこの場面、即ち物語発端の前提条件を記した場面の意味を整理しておこう。

第一は、黙許は愁嘆場の設定によって、心の底まで腐り切った回復不能の悪人でない、科人の心に訴えた罪意識の悔恨確認をうながすためのお上の婉曲的な方法成立の手段である。

第二は、科人の例として掲げられた相對死とは、お互い同士の結束確認の心情的交流、つまり信頼関係の成立をめざした行為が殺人という結果を持たざるを得なかった悲劇の謂である。

これらの前提条件を基に、物語の発端を見ていくことにしよう。

寛政改革期の時代状況

前提条件を語った語り手は、いよいよある日の高瀬舟の中に眼を注ぐ。ある日とは、冒頭、こんな風に語られる。

「いつの頃であったか、多分江戸で白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政の頃でもあっただろう。」いかにもざらり

と、何食わぬ顔で語っているが、それが歴史小説の時代設定としての限定条件を示す。

白河楽翁侯は松平定信、寛政の改革を行ったお上の責任者である。改革は儉約令、棄捐令、七分金積立、人返し、人足寄場等の諸政策で、特に財政の緊縮を目的とした改革であった。お上の責任者が老中であるならば、奉行はその配下、同心はさらにその配下となるのであるから、世を挙げて儉約一色、儉約こそが美德であり、儉約こそが修業の結果仏へ帰依する幸福への道筋であった。こうした時代状況の中に生きぬく人物として庄兵衛が先ず登場する。ハイデガー言うところの「世界内存在」としての庄兵衛が喜助の視点人物として登場する。常に寛政改革期の役人の価値観に浸りきった同心庄兵衛は、初めて珍しいと語り手が語る住所不定の男、喜助に遭遇する。

そして、これまで、愁嘆場を演じてきた科人のイメージと異なったこの男に違和感を感じる。弟殺しを犯した人間としては、その様子が不思議でならないというのである。ここで語り手のように、庄兵衛の心の中に入って、庄兵衛の感じた喜助の不思議な要素を整理してみよう。

第一。

いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても、逆らわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装って権勢に媚びる態度ではない。

何故これ程までに執拗な描写があるのであろう。単に真面目で、正直で、素直で、謙虚な人物像を印象付けるためではあるまい。ここでは、少なくとも喜助なる人物が、お上の行ったことに対して、真心から感謝し、敬意を払っていることを読み取らねばなるまい。お上の行ったことへの感謝は、当然、自分の行ったことへの反省の上に成り立っている。法的に罰を受けることが当然の結果として、喜助は自分の行為の社会的制裁を何らの疑いもなく飲んで受け

入れようとしている。人が人として社会の中に伍していくための約束として、守るべきこととして、真摯な態度を示しているのである。このことは、今後の庄兵衛の見る喜助への評価と等価である。つまり、小説としては、人物の統一性への必然的伏線として、位置づけられていると見るべきである。

寛政の改革で、世の中が騒然としているのが嘘のように、入相の鐘に散る春の夕に出た高瀬舟は、庄兵衛の不思議に想う心に乗せて、再び、月の輪郭をかすませる景色の中に浮かび上がる。科を認めた平靜さが、ひっそりとした舟の進行を支えている。水のささやきは、今後の喜助の道筋への暗示であろうか。

「夜舟で寝る」ことを許されているにもかかわらず、喜助は、役人と真向かつての緊張のためか、これから始まる生活への興奮のためか、眠れない。

ここで庄兵衛の第二の不思議が発生する。

喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従って、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。その額は晴れやかで、目には微かながやきがある。

正当性、自信、充実感、希望のある表情である。殺人を犯して、半年後の顔ではない。孤独感、喪失感、悔恨等が心を覆って打ちひしがれた姿を見る者に与えるのが一般である。ここに何があるのか。庄兵衛でなくとも合点がいかぬのは当然である。

さらに細かな描写が続く。庄兵衛はこんな喜助の姿を観察する。

それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、若し役人に対する気兼ねがなかったな

ら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌いだすとかしそうに思われたからである。

心に何の蟠りもなく、目のかがやきすら感じられる表情から、今度は楽しく愉快的表情を見てとった庄兵衛は、弟殺しと今の表情との落差にますます付いていけなくなる。つまるところ、庄兵衛は「弟を殺したあなたは、普通ならその恐ろしい行為への悔恨やら、罪の意識やら、自省の念やらで打ち沈んでいるはずなのに、どうして、そのような晴々しい表情をしていられるのか、どうして楽しげな笑いまでうかべられるのか」という「問い」を持ったのである。そのことが不思議であり、その答えを聞きたくて仕方がなかったのである。

A

庄兵衛の「問い」

ところが、彼はその疑問を真つすぐに「問う」ことをしなかった。庄兵衛は、次のような「問い」を発する。

「喜助。お前何を思っているのか。」

これが第一の「問い」である。

「実はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聞いてみたかったのだ。己はこれまでこの舟で大勢の人を島へ送った。それは随分いろいろな身の上の人だったが、どれもこれも島へ往くのを悲しがって、見送りにきて、一しよに舟に乗る親類のものと、夜どおし泣くに極まっていた。それにお前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはいないようだ。一体お前は どう思っているのだい。」

楽しく鼻歌でも歌い出しそうな喜助に対して、「苦にしてはいないようだ」と婉曲な言い回しになっているのは、

問いを發する個人的な言い訳を含んだ遠慮の現われでもあろうが、問題は、問いそのものの中味である。ここでの問いは、次の一点に絞られる。

「他の者と比べて鳥へ往くのを苦にしていけないけれど、お前は、どう思っているのか」發した問いを仔細に見るまでもなく、ここには当初庄兵衛の抱いた「弟殺しなのに楽しんでしている理由はなぜか」という不思議はない。

殺人を犯した罪人なのに、楽しげな訳を問いたいという庄兵衛の眞の疑問は、この問いからは出てこない。この問いに対して喜助は、正直に問いの「答え」だけを申し述べる。

①他の人との比較、②命を助けられた礼、③居場所を保障されたこと、④もらった二百文の鳥目、⑤食にありつたこと、⑥二百文を元手に仕事ができることへの喜び。この六点に関する理由を述べて、喜助は口を噤む。

①から⑥までは、正に喜助の鳥へ往くにあたってのお上の下した条件への感謝と、今後の生活への希望が述べられている。だが、殺人を犯したことに關しての心情は何も述べられていない。不思議なのは、こうした喜助の答えに對して、庄兵衛が何の齟齬も感じていないことである。当初抱いた自分の疑問が解決しないばかりか、それ故に自分の行った問いそのものへの反省もないのである。

庄兵衛は、唯、「うん、そうかい。」とは言ったが、「聞くこと毎に余り意表に出たので、これも暫く何も言うことが出来ずに、考え込んで黙っていた。」ので、問いに對して、十全な答えを終了した喜助の沈黙に呼応して、庄兵衛は内省に入ってしまう。

だがこの内省は語り手の視点で書かれている。物語の状況の展開し始めた解説的な語りとの関わりを通して、語り手の語る庄兵衛の思考をたどることから彼の人間性を整理してみよう。

まず、①

「平生人には吝嗇といわれるほどの、儉約な生活をして」いる。しかし、②「不幸なことには、妻を好い身代の商人の家から迎えた。そこで女房は夫の貰う扶持米で暮らしを立てていこうとする善意はあるが」「夫が満足する程手元を引き締めて暮らしていくことが出来ない。動もすれば月末になって勘定が足りなくなる。すると女房が内証で里から金を持ってきてて帳尻を合わせる。それは夫が借財というものを毛虫のように嫌うからである。」

以上が庄兵衛の「わが身の上」である。

ここで特に注目したいのは、語り手の視点から述べられている庄兵衛にとって「不幸なことには妻を好い身代の商人の家から迎えた」という部分である。語り手は先に儉約令の出ている寛政期の京の時代背景を語って、国を挙げて役人の間に浸透しているであろう価値観を提示した。そして、ここで語り手は、「儉約する善意はあるが」「夫が満足する程」ではない妻を迎えた庄兵衛は「不幸」であると断言する。つまり語り手も庄兵衛と一緒に、儉約を美德と称え、そうした生活を維持することへの憧憬を求めている。

庄兵衛の喜助への見方

さて、妻への不満を抱いた庄兵衛が喜助をどう見て、どう評価するかは、自ずから明確になってくる。

庄兵衛の行った喜助との比較のあらましを整理すると次のようになる。

①共に得た金が右から左へ移ってしまうのは、そろばんの桁の違いだけで、同じ境涯である。だが、自分には喜助のような二百文の貯蓄すらない。②二百文を貯蓄と呼ぶ喜助の心持は理解できるが、不思議なのは、「喜助の欲のないこと、足ることを知っていること」である。③「喜助は為事を見付けるのに苦しんだ」けれども、見付けさえすれ

ば、骨を惜しまずに働いて、「ようよう口を糊することの出来るだけで満足した」④牢に入って食を与えられ、「生まれてから知らぬ満足を覚えた」

この四点の中で、③の「ようよう口を糊することの出来るだけで満足した」という庄兵衛の個人的な評価に注目したい。この満足ということばで、庄兵衛は、自分の生活を振り返って「手一ぱいの生活である。然るにそこに満足を覚えたことは殆んど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずとも過ごしている」と述懐するに至る。このことは何を意味するのか。

B

「足ることを知る」と「儉約」についての庄兵衛の評価

ここでは、「欲のないこと、足ることを知っていること」への庄兵衛の思惑について考えてみたい。「足ることを知る」とは、欲があることを前提にして、その上で、その途中で思いとどまることの出来る心の状態を指すわけであるから、この二つの状態は矛盾する。喜助は欲がないわけではなく、欲が無いと思える程に、という意味に解したらいいのではないかと思う。そして、「足ることを知る」ための日常的な方法が、儉約であるから、儉約に徹しきった喜助は、先に時代状況の項で述べたように、庄兵衛にとって理想的人物ということになる。庄兵衛は、そうした生活を送っている喜助を「ようよう口を糊することの出来るだけで満足した」と断定する。これは、語り手が庄兵衛に寄り添って語っていることであるから、語り手もそのように判断していると解釈できる。つまり庄兵衛は、喜助の苦しい生活の中にあっても「足ることを知っている」故に、満足していると思つてゐる、ということになる。さて、そうした理解に基づいた称賛の上に、自分が満足し得ないこと、幸不幸の意識にも上がらないこと、そのくせ、不安が頭を

もたげることと比較して、その懸隔がどうして生じてくるか考える。何かその「根柢はもっと深い処にあるようだ」と思うが、その答えは思考の範疇には入ってこない。それ故、その根柢を庄兵衛は金銭的な尺度から人生一般の問題へと敷衍する。人間の欲望には財欲だけでなく、愛欲、食欲等種々の欲が存在するが、仏教で言うところの欲を乗り越えたところにいるのが喜助だと敷衍するのである。そうして、人生上のあらゆる欲望から超然としたかに見えた喜助の頭から毫光が射すように感じたのである。

普段役人としてお上から授かった財政上の規約に従うことは、仏という倫理上、宗教上の価値観に支えられて庄兵衛という人間を創り上げる。こうした人生上の規範への承順は、その後金銭的なことに留まることなく、法的秩序を初めとするあらゆる社会的規範にも敷衍されることになる。

庄兵衛第二の「問い」

さて、こうして尊敬の念を抱いた庄兵衛は、喜助に「さん」付けをしてから二つ目の問いを発する。彼は次のように問う。

「色々のことを聞くようだが、お前が今度島へ遣られるのは、人をあやめたからだと言ふことだ。己に序にそのわけを話して聞かせてくれぬか」

再び、庄兵衛の基本的な「問い」に戻ることにする。彼は、弟殺しをしたのに、何故に笑っていられるのか、不思議を問うつもりであった。その問題は未だ解決せず、「第一の問い」では島へ往く心持を問うて、「何を考えているか」というものであった。そして、島での生活が楽しみだという「答え」の後の問いが、この「人を殺した訳」とい

うことになる。庄兵衛の疑問は、またしても本来の問いから遠く隔たってしまった。喜助は再び正直に、この問いに答える。以下、その「答え」を整理していくことにする。

「どうも飛んだ心得違いで、恐ろしいことをいたしましたして、なんとも申し上げようがございませぬ。跡で思つてみますと、どうしてあんな事が出来たのかと、自分ながら不思議でなりません。全く夢中でいたしましたのでございます。」

喜助にとって、敬うべき、お許しを戴いた感謝の対象であるお上の役人を前にしての口上であることを承知の上で、謙虚に正直に受け止めると、この部分は冒頭での高瀬舟で送られる罪人の状況と全く同じ類型に属していることが分かる。

「所謂心得違いのために、思わぬ科を犯した人」は「獐悪な人物」ではない。日常生活では普通の心根のやさしい人物が、ある急激な状況の変化によって、予期せぬ行動に出た訳で、それは振り返って日常に戻れば、夢中になってやってしまった、意識外のこと、ということになる。以上冒頭との呼応関係を確認し、心に留め置いて、もう少し、喜助の話を聞いてみよう。

喜助の答え

話は、喜助の生い立ちの部分に遡る。整理すると、次の三点の内容から、二点の項目が抽出される。

①小さい時に二親が時疫で亡くなったため、弟と二人跡に残ったこと。②初めは町内の人たちが不憫をかけてくれ、走使などさせて戴き、飢え凍えもせずに、育ったこと。③成長して職探しにも働くにも、兄弟二人が助け合って、互

いに離れないように暮らしてきたこと。

①ここでは、兄弟二人がいかに協力し合って仲良く生活していたかということ ②近所の人の温かい恵みがあった、幼い頃の生活が成り立っていたこと。と二点に注目しておけばよい。この二点こそ後の喜助の人間性を育む大きな要素になっていくからである。

次は、具体的に昨年の秋からの限定された時期の状況での告白である。出来事の起こる前の設定は、二人が西陣の職場で空引きなる仕事をしていて、途中、弟が病気で働けなくなり、弟は仕事から帰った喜助に「一人で稼がせては済まない、済まない」と言っていた、ということである。

この設定条件は、二つの点で注目に値する。第一は、先の告白での庄兵衛の反芻を語った語り手の表現、「喜助は世間で為事を見附けるのに苦しんだ。それを見附さずえれば、骨を惜しまずに働いて、ようよう口を糊することの出来るだけで満足した。」から考えられる、その当時、喜助が幸せな心持ちでいたと庄兵衛は解釈しているということである。第二点は、仕事からの帰宅を待っていて、「済まない」と述べる弟の兄に対する感謝と申し訳なさから来る自己への呵責の念である、ということに着目しておけばよい。つまり、この二点も「足るを知る」喜助と、「感謝の念」を持つ弟との相互関係の中から育まれた「喜助像」を知る上で、大きな要素となっていくからである。

殺人時の様子

さて、以上の状況を踏まえた後に、事件当時の口述を見てみよう。

或る日、仕事から帰った喜助は、弟が剃刀で喉を切って死にきれずにいるところに遭遇する。「弟は目でわた

くしの傍へ寄るのを留めるようにして口を利きました。ようよう物が言えるようになったのでございます。

『①済まない。どうぞ堪忍してくれ。②どうせなおりそうにもない病氣だから、早く死んで少しでも兄きに楽がさせたいと思つたのだ。…刃は齧れはしなかつたようだ。これを③旨く抜いてくれたら己は死ねるだろうと思つている。物を言うのがせつなくて可けない。どうぞ手を借して抜いてくれ』と云うのでございます。』

ここでは、三つの注目すべき内容がある。

①「済まない」とは一緒に仲良く仕事をして苦勞を分け合い、一心同体となつて働いてきたのに、勝手に自分だけ消えてしまおうとして申し訳ない、という意味である。喜助のためを思つてわが身を犠牲にする弟の姿は、正に献身そのものである。②の「どうせなおりそうもない病氣」であるとは、この今の一回だけの行為が全てを一律に決定づける瞬間的な正義であることを明言している。つまり、もう後へは引けない切羽詰つた究極の状態なのであるという判断を喜助に迫っている、ということである。③の「旨く抜いてくれたら」の意味は、刃を動かし回すのではなく、刺した道筋を間違ひなくストレートに帰してほしい、抜いてほしい、そうしたら、己は楽に死ねるだろう」と言うのである。したがつて、「旨く抜く」用心は、喜助に求められた弟による使命である。

断末魔の視線

さて、この三つの点を位置づけておいて、次の語りを見てみよう。

どうしようと云う思案も附かずに、弟の顔を見ました。弟はじつとわたくしを見詰めています。わたくしはやつとの事で、『待つていてくれ、お医者を呼んでくるから』と申しました。弟は怨めしそうな目附きをいたしまし

たが、(略)『医者がなんになる。ああ苦しい、早く抜いてくれ、頼む』と云うのでございます。わたくしは途方に暮れたような心持になって、兄の顔ばかり見ておりました。

思案も附かずに「見る」↓弟はわたしを「見詰める」↓お医者を呼ぶと言う↓怨めしそうな目付き↓途方に暮れて「見る」

一貫して目の対話である。それも弟に主導権を握られた喜助が、常に受け身となって困り果てている対話である。死なんてとんでもない。生きていてほしい。殺す訳にはいかないといいた兄としての積極的な言辞を弄することもできなかった。唯々弟の怨めしい誘発に吸い込まれるように身を委ねざるを得ない途方に暮れる喜助の眼差しがあった。今さら医者を呼んでどうなるものでもない。来るのに時間が掛かるだろうし、来たところで手の施しようもない。少し考えれば分かりそうな無謀なことを考えている自分にも呆れかえるが、だからといって、何をしてよいか分からない。弟は命を懸けて懇願し、怨嗟の声を上げんばかりに迫ってくる。否、有無を言わず鋭く、この苦しみを判れと訴える。ここには、唯、弟を助けたいというひたすらに強い意志も萎えてしまい、視線に飲み込まれて茫然自失する喜助の姿があるばかりである。今まで、二人だけで築いてきた心の絆の行き先が、これまで見たこともない弟の出現によって宙に浮いてしまったのである。次の発言を聞いてみよう。

こんな時は、不思議なもので、目が物を言います。弟の目は「早くしろ、早くしろ」と云って、さも怨めしうに私を見ています。わたくしの頭の中では、なんかこう車の輪のような物がぐるぐる回っているようでござい
ましたが、弟の目は 恐ろしい催促を罷めません。それにその目の怨めしうなのがだんだん険しくなつて来て、

とうとう敵の顔をでも睨むような、憎々しい目になってしまいます。それを見ていて、わたくしはとうとう、これは弟の言った通りにして遣らなくてはならないと思いました。

①「不思議なもの」は口より目の方がものをいう、という体験である。「こんな時」とは、口でしゃべれない、生きるか死ぬかの極限状況の中で、ということである。つまり、喜助の日常生活から全く異なつた危機的状況の世界で、ざりざりに追い詰められた人間の見せた真実の意思の発露を示すそうした瞬間のことである。日常性から見れば、全身全霊の意思が集中的に目から注がれたわけで、正に不思議な力を持つて感応を与える世界である。だから私の中では、「早くしろ」という怨めしそうな眼差しと、一方に弟を殺してしまふ、剃刀を抜くか抜かぬかという二律背反が一続きとなつて、ぐるぐるとルーレット状に回りめぐり、その回転の速さに静止したかのような軸を中心として、周りに混濁した霧が立ち込めている。

そうした兄を見据える弟の目は、さらに恐ろしく、殺せという一点をめざして強く鋭い矢を突き刺そうと迫ってくる。喜助はそれを「敵の顔をでも睨むような、憎々しい目」と表現する。二人のこれまで培つてきた絆は冷たく遮断されて、憎しみの権化となつてしまつた。それほどまでに追い詰められた弟の苦悩は、喜助の強い絆故に喜助の体に移ってくる。喜助は弟の苦しみを自分の苦しみとして感じ始める。もう一刻も猶予はならない。放置すれば、弟は七転八倒の苦しみにもだえ、やがて絶命するであろう。ついに彼は決意する。

「わたくしは、『しかたがない、抜いて遣らざるぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと変わつて、晴れやかに、さも嬉しそうになりました。」

晴れやかに、さもうれしそうには、冒頭の喜助の表情と酷似している。否、全く同一といってもよい。「晴れやかで……いかにも楽しそうで」(両者の間に牽引力の働いていることをここでは確認しておく必要があるだろう。)

さて、そこで喜助は、横になって体を預けた弟に向かって、剃刀をすつと引く。

その時婆さんが入ってきて、読者の視点はいったん離れるが、再び喜助に戻ったとき、彼の次のような言葉に出会う。

「わたしは剃刀を抜くとき、手早く抜こう、真直に抜こうと云うだけの用心はいたしましたが、どうも抜いたときの手応えは、今まで切れていなかった所をきつたように思われました。刃が外の方へ向いていましたから、外の方が切れたのでございましょう。」

これは、弟の先の依頼のことば③「これを旨く抜いてくれたら己は死ぬるだろうと思っている。」を受けている。「旨く抜く」とは、「手早く、真直に」、スマートに抜いて、余分な関わりを加えることなく、楽に早く死ぬることの条件として、弟の考えたことであろう。だから、旨く抜くために、用心をして抜こうとした。ところが、初めての経験で、旨くなどいくはずがない。喜助の手はそれで、他のところをきってしまったように感じた、という訳である。このことが、喜助の後の思考にどう影を落としているかは判らない。^(注3) 少なくとも、庄兵衛も、語り手も、そのことは何ら言及していないのである。

再び場面は婆さんへの視点に戻り、茫然自失の態で婆さんを見送り、やがて、半分目を開いたままの弟の死に顔に目を向ける。

ここでは、死んでしまった弟への呆然とした喪失感が残っているばかりである。余りに大きな障壁にぶつかり、自分の置かれている状況さえも分からずに、唯、そこに居るだけの喜助である。

「憎々しい目」から「晴れやかで嬉しい目」に、そして「半開きの死人の目」に、めまぐるしく変わり果てた弟の目の軌跡は、喜助に信じがたい幻のような一瞬を髣髴とさせて、とらえがたい自己喪失に陥らせた。その時、婆さんも年寄衆も、人殺しも罪も、あらゆる事柄は幻影ですらなく、あるのは唯、愛する弟の屍と、弟を失った自分の腑抜けた、これも屍のような姿だけであった。

こうして告白を終えた喜助を語り手は次のように描写する。

「少し俯向き加減になって庄兵衛の顔を下から見上げて話していた喜助は、こう云ってしまったって視線を膝の上に落とした。」

ここには初めて、弟の死を悼む兄の悲しい孤独の姿がある。彼は役人から自分のところまで下りてきてくれたこの庄兵衛という老人に、心を許した裸の自分を覗かせた。

これで喜助の話は終わりである。庄兵衛の疑問は、果たして十分な解答を得たのであろうか。ここで再び、「問い」と「答え」のあらましを整理してみよう。

再び庄兵衛の「問い」を問う

弟殺しの科人なのに、何故楽しそうな表情をしているのか。これが原発問である。

その上に立って、庄兵衛の喜助への問いと答えを並べてみよう。

問 島へ往く心持が聞いて見たい。一体お前はどう思っているのだい。

答 島へ往くことに感謝、二百文を元手に仕事が出来るのを楽しみにしている。

問 人をあやめた訳を聞かせてほしい。

答 自殺未遂の弟に会って、どうせ死ぬのだから、早く剃刀を抜いてくれと頼まれて、意に染まぬが、弟の懇願する目に誘われて剃刀を抜いてしまった。

それぞれを合わせて次のように書き直してみよう。

(庄兵衛) 島へ往く心持はどんなか。弟殺しの訳は。

(喜助) 二百文貰って嬉しい。弟の自殺を本人の懇願で手伝った。

「弟殺しの札として二百文貰ったので嬉しかった。」と言う答えにすれば、庄兵衛当初の問いの答えに一応はなっている。だが、これで庄兵衛の疑問は解けたのだろうか。これではまるで守銭奴喜助の喜びではないか。

弟殺しの罪の意識は二百文獲得の喜びと矛盾するが、喜助に罪の意識は書かれていない。罪の意識がなければ、人殺しをしても差し支えないのか。そんな筈はない。ここでは、人殺しをしても喜びがある、という理由の追究だけが大切なのである。それをさえ満足できる解答があれば、庄兵衛の疑問は解けるはずである。だが、その追究を庄兵衛は行わなかった。

以下は、喜助の述懐を聞き終わった庄兵衛の心持を、語り手が語った部分である。この場面で、この小説は終わりを告げる。

まず喜助の話の条理の通っているのは、事件後半年にわたって、お上からの尋問に答えてきたためであると分析した庄兵衛は次のように述べている。

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いていたが、これが果たして弟殺しと云うものだろうか、人殺しというものだろうかという疑いが、話を半分聞いた時から起こってきて、聞いてしまっても、その疑いを解くことが出来なかった。弟は剃刀を抜いてくれたら死ぬるだろうか、抜いてくれと言った。それを抜いて遣って死なせたのだ、殺したのだと云われる。しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐えられなかったからである。喜助はその苦を見てゐるに忍びなかった。苦から救つて遣らうと思つて命を絶つた。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであつたと思うと、そこに疑いが生じて、どうしても解けぬのである。

喜助の口述の素晴らしさが、殆んどお上の尋問の結果のお洩いで条理を尽くしていたと見た庄兵衛の観察力も見事であるが、庄兵衛のこの煩悶も実に論理的な、明快な論述である。安楽死が罪かどうかを問う庄兵衛の心の中には、明らかに「それが罪であろうか。」の「か」の反語に示された「罪ではない」という意思への強調がある。冒頭で記述した如く、役人として、お上の価値観という宇宙に住む庄兵衛にとつて、お上のなすことに間違いなどあるはずはない。儉約の美德も、宗教的な權威にまで高められた悟りへの一里塚である。事実、喜助の頭には毫光さえ射していたではないか。庄兵衛の心の中にある罪という概念は、社会的規範は、個人的倫理と一致しなければならぬという一元論であつた。そこに疑問を呈することが近代的理性の端緒であることを考えれば、庄兵衛こそ、正に条理に適つた近代自我の持ち主であつたと言えるであろう。だから、庄兵衛の思考の発端は、すべてこれまでの通常概念への疑問から始まつている。彼は、それを「不思議」という言葉で表現する。これまで自分が見聞きし、固定されたイメージとして当たり前だと思われていたものが、ことごとく疑問に晒される。第一、罪人は高瀬舟の舟上では愁嘆場を演

じるものである。第二、人間は欲に振り回されるものである。しかし、こうした常識の崩れ去るプロセスは、庄兵衛には見えなかった。それは結果として突然目の前に現れた。仏の出現である。庄兵衛は喜助の中に仏の生まれる必然性を求めはしなかった。唯、疑問であった。物語は次のような記述で括られていく。

解けぬ問いへの逃避

庄兵衛の心の中には、いろいろに考えてみた末に、自分より上のものの判断に任す外ないと云う念、オオトリテエに従う外ないという念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思つたのである。そうは思つても、庄兵衛はまだどこやらに腑に落ちぬものが残っているので、「なんだかお奉行様に聞いて見たくてならなかった。」

語り手はオオトリテエなどという仏語を用いて、近代的視点を導入し、安楽死の可否を問うことで、実は、鴎外自身であったことを露呈する。このやり方が、『高瀬舟縁起』を解釈の索引にする風潮を生んだと考えることは、あながち外れているとは言えないであろう。だから、ここに至つての庄兵衛の感慨は、実は作者鴎外の感慨なのである。この小説が何故に庄兵衛の必然的な問いを離れて、あらぬ方への関心を呼び起こしていったのかは、『縁起』によつて記された作者の帰着点へ向かつて一途に走り来たる目的があつたからに他ならない。その帰着点の一つが「安楽死」であり、そのまた一つが「財産の概念」であつて、今、庄兵衛の帰結した問題は、この「安楽死」の法的解釈を巡つての問題であつたのである。つまり庄兵衛の疑問は、当初の意図を離れて、作者鴎外の関心事である、作者自らがテーマとして掲げた安楽死の可否に向かつて走り出してしまつた訳である。ところが、その結果は、如何ようにも解きが

たい永遠の困難性を示して作者の「問い」へ収束した。高瀬舟は罪の可否を問いながら、語り手によって庄兵衛の混沌とした胸中と、喜助の澄み渡った心情との間に交換しがたい溝を築いて闇の中を進んでいく。

丸投げされた「問い」を抱え込んで読者は、「問い」に答えることなど出来かねる旨を作者に投げ返しながら、世の不条理を嘆き悲しむ。

物語から読み取るもの

さて、私達は、この物語から何を読み味わったのか。これを解く鍵は、喜助の中にある。喜助から庄兵衛が読み取れなかったものを読み取ることではか、作品の中からの解答は得られない。ならば我々は庄兵衛になり変わって、庄兵衛の当初の疑問を解くための新たな問いを立て直さなければならぬ。

「喜助の暮らし向きを支えたものは何であったか。」先の「喜助の答え」の③と④を見るまでもなく、貧乏を支えたのは弟との協力態勢、愛情であり、相互の献身的な愛情関係である。幼時から数十年にわたって培ってきた兄弟愛である。相手のみを思い、足手纏いになることを避けて、自ら死を選んだ弟の献身的な行為は、喜助の心に深く突き刺さり、喜助の弟への慈愛と響きあい、弟の懇願と怨みから憎しみへと深まるほどの想像を絶する激痛からの救済を願った行為に赴く。これもまた献身愛の最たる姿である。

強い絆のもと、二人はそれぞれ命を賭けた行為に走る。喜助は結果的に弟を殺すことになるが、動機は苦しみを除くためである。結果的に死を招来しても、それは絆を確認する、お互いの信頼を確認するという点に於いては、相對死と同じ要素を含んでいる。そうした意味で、冒頭の思わぬ咎を犯した罪人の例とは、繋がっていると考えられる。

正にここに至って、物語の構成を支えた庄兵衛の「二つの問い」が、結果として誤りであったとしても、それが登

場人物相互の愛の確認的な行為を示唆していたという点に於いて、ある種感慨深いものを感じるのである。

次に、喜助の行為の意味を考えてみよう。

喜助の世界と行為の意味

喜助は終始貧乏のどん底に居た。仕事を求めて居場所を転々としながらも、兄弟二人、債鬼となつた京の人々の中であつて、支えあつて働いてきた。だが、そうした生活にも不平不満に打ちひしがれることなく、心平らかに生きてきた。庄兵衛によれば、喜助はそこですら満足していた。しかし、そこにある弟との温かい心の交流が全ての苦惱をも消去して燦然と輝いていたことを庄兵衛は理解しない。この二人の双方方向の関わりこそが、死を賭して互いの苦痛を取り除こうとした献身的な愛の具現化をもたらした。そうして喜助は極限状況の中で、真に二人が生きる道を決断した。それはまさに二人の置かれている世界からの飛躍であつた。スプリングであつた。ハイデガーの言葉を借りれば、「世界内存在」としてのダスマンの「先駆的覚悟性」の実現であつた。喜助の決断後のさわやかな笑顔は、象徴的にその必然性を語っている。直接の原因は決断を促した弟の憎しみから喜びへの転換の表情である。それは兄のかつて味わつたことのない弟の心の奥底から湧き出した笑顔であつた。この笑顔こそは、それまでのあらゆるお互いの苦惱を洗い去る感謝の表象であつた。喜助の行為後の茫然自失の態は、当然ながらその衝撃の強烈さを、殆んど期すことのない出来ない心身の疲弊を語っている。この必然性の背景にあるものが、庄兵衛の見た喜助の「足るを知る」という態度である。その理由は後に詳述するが、知足こそが欲を抑えて、相手の願望を実現させる献身的行為の源であつたからである。しかし、そのつながりに庄兵衛は気づくことが出来なかつた。それだけではない。喜助には、居場所がほしい、という唯一の欲望があつた。財産が欲しいという欲も、庄兵衛に語つていた。庄兵衛は喜助の苦惱の背景

にある兄弟相互の絆を正確に把握できずにいたことは既に書いた。今また、喜助の最も強く求めていた欲求が、二百文の財産ではなく、居場所であったことに気づいていないこともここで確認しておかなければならない。つまり、庄兵衛の喜助を把握する視点には大きな偏りがあったのである。

知足の誕生

さて、そうした欲望を抑えることで、現状に満足し得る心根を喜助はどこで得たのであろうか。庄兵衛はそのことに関わって次のように述べている。

一体この懸隔はどうして生じてくるだろう。只上辺だけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こっちはあるからだと云ってしまえばそれまでである。しかしそれは謙である。よしや自分が一人者であったとしても、どうも喜助のような心持にはなられそうにない。この根柢はもつと深い処にあるようだ、庄兵衛は思った。

幼い頃に両親を流行病で亡くし、近所の人々の仕事を請けて共生させてもらったという事実が、幼い二人にどういう精神的な影響をもたらしたかは想像に余りある。地域の人々の暖かい優しさが根底に流れ、強く逞しい兄としての自覚が芽生え、それが弟の兄思いの心を醸成し、切るに切れない絆を結ぶようになっていく。長じて独立した仕事で身を立てるようになれば、寛政期の不景気極まりない京の町が、債鬼となって襲ってくる。地盤のない、身寄りのない兄弟が経済的な安定を築いていくのは並大抵のものではなかった。改革の波にのまれて荒廃しきつた世間の中で孤立したような窮迫した状況が、二人の絆を一層強固に育て上げていく。お互いが、お互いの欲情を制御しあって関わっていかねければ、関係は瓦解し、生活は破綻する。自分たちの力ではどうすることも出来ない社会の重圧の中で、生

きていくということは、こうした知恵を二人で培っていくことであった。その結果生まれた喜助の世界観が、分を知る、ということの「分」であった。「身の程」という「世界内」であった。プラグマティックに生きるための状況打破の道は、ここでは閉ざされている。こうした世界に投げ込まれた二人の兄弟の精神形成の中に色濃く影を落としていく諦念という観念を拒むことなど、無論出来はしない。だが、そこには仏教の悟りに伴う「諦念」の哲学があった。庄兵衛の喜助に見たものは、正にこうした姿だったのである。こうして、お互いのために己の欲を制することが兄弟双方の献身的な発意に支えられて成就する。その現象的な現われが「安楽死」であり、その安楽死への決断の契機を醸成したものが、弟のために自己犠牲に安んじることによって「足るを知る心」であった。だから、「足るを知る心」は、献身成就のために己の欲を断ち、低きに安んじ、二百文の財を喜ぶ心へと一直線で繋がっているのであり、両者に共通するこの献身こそが、喜助の人物像を形成する全ての根幹に位置づくのである。

見えてきた喜助の統一的人間像

再び繰り返す。これまで、高瀬舟論という、「安楽死」と「財産観念」という二つの鴉外の提案した主題を、どう結びつけるか、この二つに統一性はあるのか、と云った問題であった。しかし、それは記述の如く、二つの側からの追究を通しては出て来はしなかった。鴉外が興味を持った二つの主題は、後から作り上げた喜助の物語に帰結させることは出来なかった。テーマを一つに絞りきれず、分断したまま、庄兵衛の疑問は、庄兵衛の思いついた疑問の方へ流されていき、ついには、その解答を得ることなく終末を迎えた。

だが、庄兵衛の冒頭の問いを追究することを通して、私たちはそこに献身と言うキーワードを発見することが出来た。庄兵衛は己れの問いをどこかに放り出して、舟上の闇の中に消えていくが、読者は、この二つの主題にとらわれな

ければ、むしろ、自然に私たちの見たように喜助の統一された人間像を見据えていたかも知れない。

これまでの二つの「問い」に基づいた検討を踏まえて確認したことを整理すると次のようになる。

第一の、「庄兵衛は当初設定した自らの「問い」へなぜ弟殺しの罪人の顔に楽しげな様子が窺えるのか」の答を獲得しえたか」という問いは、状況に応じた問いの変遷によって、「否」と答えざるを得なかった。しかしながら、この「問い」の追究により、読み手は、庄兵衛の気づかなかった、或いは見えなかつた次のような喜助を読み取ることが出来た。

- (1) 弟の心からの願いを聞き入れ、ことに命を賭して決断したこと（献身的自己犠牲）により、悔いのない晴々とした心境に達することが出来たこと。
- (2) そうした心が、お上の処置への感謝の念をさらに高めたこと。
- (3) 弟殺しが社会的規範に基づいた罪であるかぎり、罰を受けるのは当然であり、そこに個人的理由の介入は有り得ないと割り切っていること。

こうして明らかになった喜助像を基盤にしてさらに第二の「問い」、知足と安楽死の関わりを問う問題へ足るを知り得た人間が、なぜ安楽死に加担したか、即ち「喜助の人格上の統一性」を問う問題の解答が明らかになった。即ち、「貧困にめげぬ弟への献身的な自己犠牲」と、「知足」の精神の同根であること、したがって、例え人殺しの汚名を着せられようとも、そのことが弟の懇願を受け入れる素地になっていたという点で、両者の間には、人格上何の違和感もなく、必然的な繋がりがあった」という結論を得ることが出来たのである。

以上、庄兵衛の「問い」を問い続けるといふ方法を取りながら、人物像の一体化という視点を通して、喜助その人

の人間性を明らかにした。^(註4)

C

その結果明らかになったこと

第一・第二の方法をたどることによって得た結論は、次のようなことである。

以上検討してきた如く、この作品の主題は、作者自らが言うような「安楽死」でも「財産の観念」の問題でもない。主題が視点人物による疑問の解明にあると考えるのは、読者の作者に対する信仰である。私たちはその二主題が、創作以前に設えられていたことを知っている。そして、それにこだわり続けた結果の不具合も経験済みである。即ち、今回追究した過程の中で、視点人物そのものの「問い」の在り方に問題のあったことから、次のようなことが明らかになった。

人は必ずしも自らの疑問を解明するために正鵠を得た「問い」を設定することはできない。否、むしろ、解きたい事柄と自ら設定をした「問い」との間には、いつも齟齬が横たわっている。にもかかわらず、人は、誤った「問い」の解決をもって当初の疑問の解決を得たと錯覚する。問いは答えを限定するのであった。人間相互の行き違いは、往々にしてこうした形で生まれてくる。これも一つの真実として明らかになったことである。

五つの「問い」と「答え」

次に示すものは検討してきた「問い」に加えて新たに設定した「問い」の一部である。この「問い」のもとにどのような追究が生まれるのか、授業実践に基づいた分析が出来たらと思っている。

「問い」の例

- 1 「献身」と「知足」のつながりを踏まえて、喜助の人物像は語れるかどうか。
- 2 「足ることを知る」ということと、「剃刀を引く」という行為には、人間性の上で繋がりがあがるかどうか。
- 3 殺す行為をした「前」と「後」の喜助に変化はあったのか、どうか。
- 4 主題をどうとらえたか。

いずれも初発の読みに基づく「問い」を提示したものである。相互の交流は授業の中で、初めて可能になる。

結 語

要は、読者ひとり一人が作品を貫くことの可能なレベルの「問い」を自ら設定できるか否かが問題なのである。

読者である児童・生徒・学生が個に応じて如何なる「問い」を持ち得るのか、ただ闇雲に感想を持つて、個人的な読みなどと悦に入っているのではなしに、真に発展し、深まっていく問いを、まず教師から与える必要があるのである。

また、教師の側から言えば、いつもそうした「問い」を用意しておくことが必要であり、そのことが教材研究と呼ばれる営みの第一歩となるのであろう。どこから登っても山頂には到達するであろうから、「問い」は如何ようにも設定することが出来るが、無駄なく、無理なく、自分の足で登るための鍛錬は、やはり必要なのである。

「問い」は多様な解釈を可能にすると共に、限定された世界に読み手を封じ込める。種々な「問い」から紡ぎ出された解釈を検証することで、授業はよりすぐれた「問い」を生み出すであろう。ひとり一人の読みを広げていく。

こうした営みを続けることによって、作品の根幹に迫る読みが、ひいては、読者の生き方につながる読みが可能となると信じているのである。

以上を持って、「高瀬舟」についての「問い」の考察を終わることとする。

(注1) 作品論としての二主題への検討は、作品の本質へ迫る道標として大きな役割を示してきた。同『研究史』によると、主要なその論点は、(1)ふたつの主題が分裂しているか否か、(2)分裂しているとして、両者のいずれに比重がおかれているか、(3)二つのテーマを統一する主題は果たして発見できないのか、といった点に集中している」と記されている。

だが、この問題はそもそも問題解決の視点の位置が、外部（作者）の個人的な創作意図に端を発している、という点に於いて、既にある限界を持っていた。二つの問題（主題）が「面白い」からとり上げた（『縁起』）からといって、その作品の主題が必ずしも作者の言う主題であるとは限らないのである。仮にそうだととしても(3)の問題は、ともに一人の人物の人間性の中に同居している二主題である、という点から考えれば、当然、その統一性は図られなければならないのであって、分裂した喜助像などというものは、存在するはずなどあり得ないからである。

したがって、あえて、二主題検討からの成果として(3)を提示されたことを受けて、この統一的な喜助像を希求することは、作品解釈上で最も重要な目標となると考えるのである。

(注2) 「再審の場」としての『高瀬舟』の中で、竹内常一氏は、四つに区切ったうちの第一場面を「額縁」と呼び、高瀬舟を一面では「権力のガス抜き装置」であるとし、その空間を「物事の自明性を『再審する場』と位

置づけている。

(注3) 「竹盛天雄も、ここに描かれている弟殺しは、剃刀を抜くとき余計な傷を与えたという自覚を伴うことで、
「医学上の『安楽死』の問題よりも、少し消極的なもののように解される」と述べている。」(『研究史』)
(注4) 「喜助は神の如き愚者、覚醒せざる『有道者』(高橋義孝)の卓見がある。

参考文献

- 「高瀬舟・高瀬舟縁起」森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』新潮文庫
「森鷗外先生」『斉藤茂吉全集』第五卷・第二十四卷
「森鷗外『高瀬舟』をへ読むこと」管聡子
「教室という場で『高瀬舟』を読むこと」角谷有一「文学の力×教材の力」3
「へ再審の場」としての『高瀬舟』竹内常一
「森鷗外『高瀬舟』」吉本隆明『日本近代文学の名作』
「『高瀬舟』」—— 研究史と作品論『三好行雄『三好行雄著作集』第二卷
「『高瀬舟』について」—— その成立 近代文学の基底 森鷗外と夏目漱石『三好行雄著作集 第三卷』
「『高瀬舟』『寒山拾得』とオオトリテエ」北川伊男『森鷗外の観照と幻影』
「高瀬舟」論 石田忠彦『へ新しい作品論』へ、へ新しい教材論』へ 1 右文書院
「阿部一族・舞姫』について」高橋義孝 新潮文庫